

支え合う ——ゆいグローバルネット ①



「ゆいグローバルネット」は、現地諸事情や状況を把握した上で在外邦人に対する包括的支援を展開すべく、当事者自身の力を活かしながら、国内外の専門家・邦人団体と連携した“つながり”と“交流”の場となることを目指している。

ここでは、アジア4カ国の邦人団体から、ゆいグローバルネットに寄せられた近況報告を紹介する。

インドネシア (ジャカルタ)



たくましく変化する

ジャカルタマザーズクラブ

2年以上もの間、コロナに翻弄され続け、私たちジャカルタ邦人の生活は大きく様変わりした。

まず、家族の在り方が変わった。帯同家族の多くは日本へ緊急帰国となり、1年以上にわたり駐在員と家族は離ればなれの生活を余儀なくされた。

日本へ戻った家族は先が見通せない中、子どもは日本の学校に通い、母親は日本での住まいを整え子どものケアも1人で担わなければならない。離れて暮らす家族に何かあってもすぐに駆け付けることができない。1人自室にこもり、朝から晩までリモートワークを続ける駐在員は、その心身に大きな負担を抱えた。

一方、ジャカルタでは、アパートの敷地から出ない生活へと変わった。脆弱な医療と医療崩壊、自身と家族の感染、自宅療養などコロナに関する様々な不安を常に感じている。ジャカル

タ日本人学校や主要インター校では、1年以上対面授業ができずオンライン授業が続いた。体力が有り余る子どもたちと自室内でどのように



コロナ禍で交通渋滞が減って大気汚染が改善され青空が広がるジャカルタの空

時間を過ごすか？ 子どものオンライン授業をチェックしながらいかに家事をこなすか？ は母親にとって大きな課題となった。密室で常に一緒に過ごすことにより、それぞれのストレスがダイレクトに影響し合うこともあった。

インドネシアは外出制限が厳しく、日系スーパーでも邦人の姿をほとんど見かけなくなった。しかし、この国のたくましいところで、スーパーやレストランのデリバリーサービスが急速に充実した。現地に残る邦人同士で情報交換し、日本人会やジャカルタマザーズクラブのオンラインイベント、現地情報誌や医療機関からの情報など、みんなで助け合ってコロナ禍の困難を乗り越えようとしている。

昨年末にかけて感染状況が落ち着きを見せ、日本に一時帰国していた家族の再渡航や、新たに家族と赴任してくる邦人が増えてきた。残念



コロナ禍で閑散としたショッピングモール